

2018年  
12月4日  
火曜日

2018年のFIFAワールドカップで世界を驚かせた事件は、2014年大会の優勝国であったドイツが一次リーグで敗退したことであろう。前回優勝したとき、ドイツ代表は移民への寛容と多文化主義の勝利として称揚された。優勝にはトルコ系やアフリカ系移民の子孫が貢献したのである。今大会一次リーグで敗退したドイツは、怒りの矛先を前回の功労者に向ける。最大の犠牲者はメスト・エジル選手である。彼はトルコ系移民三世のイスラム教徒である。大会前の些事が批判の伏線にある。彼は同じトルコ系のイルカイ・ギュンドアン選手とともに、トルコのエルドアン大統領と意味深長な集合写真に収まった。この写真をめぐって彼は右派からドイツへの帰属意識を疑われ、左派からは人権抑圧的で強権的な指導者との親睦を批判されたのである。今大会の敗退をうけて彼への批判は沸点に達し、エジルはドイツ代表を引退した（本人は人種差別を受けたと主張する）。

山田 仁 准教授（イギリス文学）

# 共同体の悲鳴 「これは今も私の国が」

優勝すれば国民は寛容の衣を纏う。しかしさまざまな敗北は国民に本性を露呈させる。寛容のメッキが剥がれた。

ドイツは第二次世界大戦を経て、南欧やトルコからの移民を労働者として積極的に受け入れた。移民はドイツに家族を呼び寄せ定住し、ドイツで生まれ育った二世や三世（移民の背景を持つドイツ人）は急増した。2016年現在、ドイツに居住する外国人（難民を含む）は約896万人で、全人口8243万人の約11%を占める。日本に在留する外国人は2016年現在で全人口の1.88%であるから、ドイツは日本の約6倍の外国人率を示す。この在留外国人率にエジルのような移民の背景を持つドイツ人を加えると、その比率は全人口の約23%に達する。移民の背景を持つドイツ人や難民の出生率は本国人に較べて高いため、この比率は今後も上昇が続くことが容易に推察される。見慣れない姿が視界をよぎり、聞き慣れない

言葉がドイツ語を掻き消す。キリスト教会がイスラム教モスクに取って代わる。故郷と祖国の喪失は、ドイツの週刊誌Der Spiegel (Nr. 16, 2018) をして「Ist das noch mein Land? 「これは今も私の国か?」と叫ばれる。ヨーロッパ先進国の現状もドイツに似ている。移民に限定すれば最も移民率が高い国はスウェーデンであり（18%）、英国とフランスはそれぞれ14.2%と12.6%である。

英国の詩人T.S.エリオットは、第二次世界大戦末期のラジオ講演において述べている、「ある共同体に他の民族が一定以上の量と速度で流入するとき、その共同体は崩壊する」。共同体には異邦人を受け容れる許容限度があることを示唆する発言である。大戦末期の知性が予言したことの正しさが、70年後の今欧米で証明されつつある。人間社会の許容力が理想としての価値と文化の多様化に耐え切れない。許容量を超えて急速に異物を摂取した人体は、異

物を体外に排出する反応を示す。2014年大会において優勝したドイツ代表に、ドイツ社会の衰退と病理を見る。「これは今も私の国か?」これは決してヘイトスピーチの類いの險悪と憎悪の吐き捨てではない、むしろ許容限度を超えて体内に異物を摂取した共同体の悲鳴ではないか。

我が国では、外国人労働者受け入れをめぐって国論が二分する。労働力人口減少という現実と経済成長維持という強迫観念との板挟みに日本は置かれている。確かに経済成長と社会保障制度を維持することは重要であろう。喫緊の課題であることも理解できる。しかし、それが日本の長期的混迷と結果的衰退を招くという犠牲を払ってまで断行しなければならぬ課題かどうか、日本の許容力ほどの程度なのかという問題と共に冷静に見極めることが肝要である。